2022年度　一般入学試験　後期日程

国　　語

（試験時間　60分）

注　意　事　項

1　**試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。**

2　この問題冊子は，29ページあります。

3　試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。

4　**解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので，それぞれ正しく記入し，マークしなさい。**

①　**試験コード欄・座席番号欄**

試験コード・座席番号(数字)を**記入**し，さらにその下のマーク欄に**マーク**しなさい。**正しくマークされていない場合は，採点できないことがあります。**

②　**氏名欄**

氏名・フリガナを**記入**しなさい。

5　解答は，解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば，**10** と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の(例)のように**解答番号10**の**解答欄**の③に**マーク**しなさい。

（例）

解答番号	解　答　欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

6　問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけません。

7　試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問　次の文章を読んで、後の問い（問1〜11）に答えなさい。

1　「言葉は生活の流れのなかではじめて意味をもつ」――遺稿のなかでウィトゲンシュタイン(注1)はそう綴(つづ)っている。たとえば日本語の語や文であれば、それが生活のなかで使用されてきた長大で複雑な歴史がある。【　a　】今後も、新たな生活の場面で多様な仕方で使用されていくだろう。いずれにせよ、言葉はそうした生活の流れのなかに息づき、そこで意味を成すのであって、それ自体として取り出せば、あくまでも音の連なりやインクの染みに過ぎない。言葉が意味をもつのは、言葉とともに我々が行う実践の賜物(たまもの)なのである。

2　以上の点は、ごく当たり前のことをことさらに強調しているように思われるかもしれない。確かにその通りだ。【　b　】、言葉は生活の流れとは無関係にそれ自体として意味をもつ、という思いなし(注2)は、我々が考えているよりも遥(はる)かに根深い。よく分かっているつもりでも、この思いなしにいつの間にか引きずられているのである。

3　ウィトゲンシュタインが『哲学探究』で展開する、いわゆる「規則のパラドックス」は、(A)このことを鮮やかに示す議論として見ることができる。そこでウィトゲンシュタインは、学校で教師が「0から始めて2を足していきなさい」と命令し、生徒たちがそれに従う、という場面を描いている。生徒は皆、994, 996, 998, 1000という風に(イ)ジュンチョウに紙に書き続けてきたが、そこから急に誰かが、1004, 1008, 1012と書き出してしまう。

我々はその子に言う、「よく見てごらん、何をやっているんだ！」――その子は、我々がなぜそう言うか分からない。我々は言う。「つまりね、君は2を足していかなきゃいけなかったんだ。この数列をどうやって始めたか、よく見てごらん！」――その子は答える、「はい！　でもこれでいいんじゃないんですか。僕はこのようにしろと言われたと思ったんです」。――あるいは、その子が数列を示しながら、「でも、僕はこれまでと同じようにやってきているんです！」と言ったとしてみよ。

4 (B)このような事態に直面したとき、教師にはこれ以上何ができるだろうか。その生徒に対して、「違う違う、1000 以降も 1002, 1004, 1006 と続けていくんだよ！」と言えばよいのだろうか。しかし、生徒が言われる通りに 1002, 1004, 1006 と書いた後、1010, 1014, 1018 と続けてしまったらどうか。「だから、そうじゃない！　1006 以降も 1008, 1010, 1012 と続けるんだ」と教えるべきだろうか。(C)これではきりがない。つまり、数は無限に続く以上、この対処の仕方では生徒がどこかでまたおかしな数字を書き始める可能性を原理的に排除することができない。たとえ、「2, 4, 6, 8, ……, 10000006, 10000008, 10000010 という風に続けなさい」と言って、厖大な数列を実際に書き記して生徒に見せたとしても、生徒は、10000010 の後に 10000014 と（あるいは、10000020 や 10005555 などと）書くかもしれないのである。

5 だとすれば、「2を足していけ」の代わりに、「n＋2を実行せよ」などと言えばよいのだろうか。しかし、そう言い換えても根本の問題が解決するわけではない。なぜなら、「n＋2」も、「2を足していく」と同様、それ自体としては記号列（音の連なり、インクの染み）に過ぎないからだ。「1000 以降も2を足していく」や「1000000 以降も2を足していく」なども同様である。記号を別のものに変えても、どんなに長く数列を付け加えても、どんなに細かくパラフレーズしても、どれもそれ自体としてはただの記号列であることに変わりはない。ただの記号列がそれ自体として意味をもち、何がその意味に適合した行為であるかをアプリオリ(注3)に規定している、などということはありえない。「n＋2」も「2を足していく」も「1000 以降も2を足していく」も、それだけでは、我々が数をどういう風に書き続けるべきかをあらかじめ決定することなどできないのだ。

6 たとえば、先の引用における生徒は、「2を足していく」という記号列を、「1000 までは2を足し、その後は4を足していく」という意味として理解していたのかもしれない。これに対して、「そんな理解の仕方はおかしい。単純に2を足していくと言っているんだから」と怒っても仕方がない。というのも、「単純に2を足していく」とはどういうことだろうか。それはつまり、「1000 以降も2を足していく」といったことなのではないか。だとすれば、生徒が今度はこの記号列を「1002 までは2を足し、その後は4を足していけ」という意味だと理解する可能性を排除することはできない。

7 結局のところ、「2を足していく」にせよ「単純に2を足していく」等々にせよ、記号列それ自体は単なる音の連なりやイン

クの染みに過ぎない以上、原理的にはどんな風にも解釈可能である。言い換えれば、原理的にはどんな意味ももちうる。そうである以上、「2を足していけ」にせよ何にせよ、行為の仕方を決めるはずの明示的な規則（命令）は、ある意味では行為の仕方を決定できない、ということになる。何をやっても規則に従っていると強弁できてしまうからだ。このウィトゲンシュタインの議論を、一般に「規則のパラドックス」という。

8 かつて、これほど奇妙で過激な状況を提示してみせた哲学者がいただろうか。しかし、これはウィトゲンシュタインに言わせるなら、記号がそれだけで意味をもつことはないという、ごくシンプルな事実からの当然の帰結に過ぎない。

9 このことを、「石を拾う」という記号列を例にもう一度確認しておこう。日本語使用者には馴染（なじ）みのこの記号列は、イあたかもそれ自体として明確な意味を備えているように思えるかもしれない。しかし、この言葉は文脈によっては、河原に転がっている石を拾うことを意味することもあれば、「石」という名字の人を車でピックアップすることを意味することもある。また、「石」と名づけた捨て猫を家に持ち帰ることも意味しうるし、実はスパイが用いている暗号で、とある特殊な任務を(ロ)スイコウすることを意味する、ということもありうる。さらに、これが全く意味不明な記号列を表していることになる文脈も無数にあるだろう。いずれにせよ、どんな文脈に置かれているかに関係なく、「石を拾う」がそれだけで特定の意味をもっており、我々がこれをどう使用すべきかをあらかじめ決定している、というわけではない。

10 (a)この指摘に対して、「いや、我々は「石を拾う」という言葉から、一定の明確なイメージを(ハ)カンキされるはずだ。そのイメージこそが意味を決定してくれるのだ」といった反論があるかもしれない。(b)しかし、この言葉を聞いてたとえば上のような文字通りのイメージ（画像、映像）が思い浮かぶとしても、事情は何も変わらない。(c)あるいは、この人は石ではなく饅頭（まんじゅう）をもっていて、それを食べようとしている可能性もある。(d)ほかにも無数の解釈がありうるだろう。(e)つまり、「石を拾う」という言葉に加えてイメー

ジなどを持ち出したとしてみても、それによって言葉の意味が決まるわけではないのである。

11 ではいったい、言葉の意味はそのつど何によって定まるのか。それは先述の通り、生活の流れだ。すなわち、記号が我々の生活のなかで使用され、特定の役割を果たすその具体的な状況こそが、その記号をまさに意味ある言葉にするのである。たとえば学校において、教師が「2を足していきなさい」と言い、生徒たちが紙に数字を書いていく状況。そこでは、1000の後に1004と書く生徒は普通はいない。あるいは、そのように書いた生徒は教師に「違う！」と訂正され、その指摘に素直に従う。さらに、生徒たち自身も、ときに自他の誤りを訂正することがある。いずれにせよ、そのような種々の行為を行いつつ、彼らは1002, 1004, 1006……と書き続けていくだろう。(D)こうした具体的な実践の全体が、「2を足していく」という記号列にいわば生命を与えているのである。

12 肝心なのは、繰り返しになるが、「2を足す」とか「n＋2」といった言葉（記号列）ですらアプリオリにその意味が確定しているとは言えない、ということである。「2を足す」の決定的な定義を語ることができないのは、たとえば、前期ウィトゲンシュタインが考えるような意味での「論理」――すなわち、言葉を有意味にするアプリオリで普遍的な秩序――なるものが語りえないから、といったことではない。そうではなく、「2を足す」という言葉をめぐる具体的な諸実践の全体においてはじめて、この言葉が意味を成すからなのである。

13 「規則のパラドックス」の発生状況は、まさにこの点を露わにする例だ。ウィトゲンシュタインが描いた例のように、普通でない生徒――あるいは、発想が異様にジュウナンな天才児――によって「2を足す」という言葉が多様な意味で理解される可能性は、原理的には排除できない。ましてや、「石を拾う」といった言葉であれば、その種の異様な例をこしらえるまでもなく、生活の流れ次第でその意味が多様でありうることは明白だ。

14 言語に着目する哲学者は、ウ 得てして言葉のみに焦点を当て、たとえば、語がそれぞれどのような対象を指示し、文は語からどのような仕組みで構成されるのか、といった探究に目を奪われる。これに対してウィトゲンシュタインは、言葉が織り込まれた実践全体に目を向けるように促す。そして、そのために彼が案出した用語が、「言語ゲーム」である。

15 彼は、「言葉と、それが織り込まれた諸行為の全体」を言語ゲームと呼ぶ。また彼は、次のようにも述べている。

「言語ゲーム」という用語はここでは、言葉を話すということが活動の一部分、あるいは生活形式（Lebensform）の一部分であることを際立たせるべきものである。

16 たとえば日本語の個々の言葉は、それ自体としては音の連なりやインクの染みに過ぎない。それらは、日本語とともに生きてきた人々の生活形式――長い時間をかけてかたちづくられてきた生活のあり方、生活の一定の流れ――を背景にした、そのつどの活動ないし実践のなかで使用されることではじめて意味を成す。

17 したがって、言語について考察することは、「語は対象を指示する」とか「文は現実の模型である」といった一般的定義――語や文の本質――を探し求めることではなく、個々の言語ゲームが展開されるそのつどの文脈や、その背景にある各文化の生活形式、さらには文化を横断した人間の諸特徴といった具体的な事柄に対する探究でなければならない。実際、ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

命令し、質問し、語り聞かせ、おしゃべりすることは、歩き、食べ、飲み、遊ぶことと同様に、我々の自然誌に属している。

我々が提供しているのは元来、人間の自然誌についての考察であるが、しかし、それは風変わりな事柄にまつわる貢献ではなく、誰も疑わなかった事柄の確認であり、常に我々の眼前にあるがゆえに注意されることのなかった事柄の確認なのである。

18 命令にせよ、質問にせよ、おしゃべり等々にせよ、言葉を話すというのは人間の自然誌ないし博物誌（Naturgeschichte /

natural history）の一部である。すなわち、人間にまつわる極めてタサイ(ホ)な事象や活動――多くの文化に共通であったり、逆に、文化によって色々と異なったりするような、多様な事象や活動――の一部である。もしも、人間の自然誌（博物誌）の一環として、我々が自分たちの様々な言語ゲームのあり方を漏れなく記述しようとすれば、それはあまりに厖大なものとなるだろうし、そもそも書き終えることができないだろう。というのも、我々が行う言語ゲームは日々生まれ、刻一刻と変容していくものだからである。ウィトゲンシュタインが強調するのも、言語ゲームの途方もない多様性と、生成変化に富むそのダイナミズム、可塑性である。

（古田徹也の文章による。ただし、一部変更した。）

（注）1　ウィトゲンシュタイン　…　ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン。オーストリア生まれの哲学者（一八八九―一九五一）。現代の哲学思想の潮流に大きな影響を与えた。その著書『哲学探究』は、遺稿として一九五三年に刊行された。

2　思いなし　…　それだろうと考えてみなすこと。思い込み。

3　アプリオリ　…　先験的。具体的状況に依存せず、あらかじめそのように成立していること。

問1　空欄【 a 】・【 b 】に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 1 ・ 2 。

a　1

① だが　② かえって　③ また　④ かたや　⑤ はたして

b　2

① たとえば　② さらに　③ つまり　④ しかし　⑤ しょせん

問2　破線部**ア**「ことさらに」・**イ**「あたかも」・**ウ**「得てして」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 3 ～ 5 。

ア「ことさらに」 3

① 不自然に
② 無意味に
③ 粘り強く
④ 無理に
⑤ 意図して

イ「あたかも」 4

① まるで
② 一見
③ 時には
④ もしかすると
⑤ もともと

ウ「得てして」 5

① 必ず
② 状況に応じて
③ 多くの場合
④ 時々は
⑤ まれに

問3　波線部Ⓐ「このこと」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **6** 。

① 言葉は生活の流れとは無関係にそれ自体として意味をもつということ
② 言葉の意味は我々の実践によって大きく変わってきたということ
③ 日本語には生活のなかで使われてきた長大で複雑な歴史があること
④ 言葉の意味を生み出してきた生活の流れが不当に軽視されていること
⑤ 言葉にそれ自体としての意味はなく生活の流れのなかで意味が生じること

問4　波線部(B)「このような事態に直面したとき、教師にはこれ以上何ができるだろうか」とあるが、ここで「教師」が直面しているのはどのような事態か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 7 。

① 生徒が指示を無視してやりたいように計算をしてしまう事態
② 生徒が教師の不明確な指示のために混乱してしまった事態
③ 「0から始めて2を足す」という指示の意図と生徒の理解が異なる事態
④ 生徒が教師の言ったことを聞き間違えて4を足してしまう事態
⑤ 教師が高圧的な口調で行った指摘に生徒が反発している事態

問5 波線部(C)「これではきりがない」とあるが、なぜ「きりがない」のか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **8** 。

① 教師が正しい数字をいちいち示して生徒に書き取らせる教え方では、厖大な正解を示したとしても生徒自身で正解を出せる力はいつまでも身につかないから。

② 教師が厖大な数列を実際に書き記して生徒に写させようとした場合、その作業のどこかで生徒が再びおかしな数字を書き始める可能性を排除できないから。

③ 数は無限に続く以上、生徒の計算違いを教師がそのつど指摘する方法では、間違いの可能性を教師が予測して排除することが原理的に不可能になるから。

④ 数は有限のものではないので、書くべき数字を具体的に示す方法では、生徒が教師の意図とは異なる数字を書き始める可能性がどうしても残るから。

⑤ 数は無限に続く一方、教師が示せる正解の量には上限があるので、法則性に基づいた正確な数列を書くためには一般的な教え方を切り捨てる必要があるから。

問6　第⑩段落からは、記号(a)～(e)で示す箇所のいずれかに入るべき次の一文が脱落している。この一文が入る箇所として最も適切なものを、後の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 9 。

このイメージは、人が石を拾っていることも表しうるし、逆に、石を捨てようとしていることも表しうる。

① (a)　② (b)　③ (c)　④ (d)　⑤ (e)

問7 第9・10段落の本文中におけるはたらきについての説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **10** 。

① 言葉はアプリオリに意味をもたないという主張について、新しい材料を用いて補強している。

② 「規則のパラドックス」の成立に関して、これを疑問視する意見を封じようとしている。

③ 第11段落以降の内容を先取りし、「言語ゲーム」の理解を助ける導入として書かれている。

④ 記号列に具体的な場面のイメージを結び付けると、記号を正しく解釈することができると論じている。

⑤ イメージ（画像、映像）という新しい要素をここで追加することで、論旨を急転させている。

問8 波線部(D)「こうした具体的な実践の全体が、『2を足していく』という記号列にいわば生命を与えているのである」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 11 。

① 言葉の意味は、その記号列が我々の生活のなかで実際に使われて特定の役割を発揮する具体的実践の総体のなかで与えられるということ。

② 言葉はあくまでも記号列に過ぎず、私たちがその言葉をめぐる具体的な諸実践を行うなかで次第に言葉の意味が拡大していくということ。

③ 私たちが言葉の正しい意味を学ぶためには、様々に試行錯誤をしたり他者に誤りを訂正されたりする具体的状況が不可欠だということ。

④ 言葉の意味はあらかじめ言葉に内在しているのではなく、生活状況における私たちの実践に合うよう恣意的に構築されているということ。

⑤ 私たちが日常的実践のなかで記号を使用する行為が歴史的に蓄積され、それによって言葉の意味は次第にひとつに収束していくということ。

問9 本文に基づいてウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の内容を端的に表したものとして最も適切なものを、次の①～⑥の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **12** 。

① 言葉に本来内在する遊戯的な要素
② 言葉が使われる具体的状況や場面等の環境
③ 言語使用上の語や文の普遍的機能
④ 人類が言葉を操ってきた歴史の総体
⑤ 諸活動における言葉の使用およびその状況
⑥ 生活実感に根ざす素朴な言葉の交換

問10 筆者は、言語についての考察ではどのような事柄を踏まえることが重要であると論じているか。本文全体の論旨およびウィトゲンシュタインの主張との関連も踏まえた上で、その説明として適切なものを、次の①～⑦の中から**三つ**選び、記号で答えなさい。解答番号は 13 ～ 15 。

① 言葉は、我々が生活のなかで言葉を使う実践とは独立してそれ自体として意味をもっている、という思い込みは存外に強い。実践の重要性についてよく承知しているつもりでも、この思い込みに影響されているのだ。

② 命令という、なすべき行為という明確な意味を伝えるはずの言葉が、実はとるべき行為をきちんと規定できない。このことから、すべての言葉の解釈は多様であり、結局どうあっても確たる意味をもちえないという結論が得られる。

③ 「石を拾う」という比較的ありふれた記号列を解釈する際、私たちは各人それぞれの過去の生活誌を活用する。言葉の理解に多様性を与えている記号列の性質に関する考察こそが、言語学にとっては重要なテーマだ。

④ 言語を扱う哲学者は、言葉を単独で問題とし、構成要素の機能や要素間の関係を分析して言語の本質を探し求めようとするきらいがある。しかし重要なのは、言葉を包摂して成り立つ状況や人間的活動を具体的に検討することである。

⑤ 言語に関する考察の対象は、静態的に書記された言語ではなく、質問、命令、おしゃべりなどに用いられる実用的言語だ。このとき言葉自体は、歩いたり食べたりすることと同様、人間の自然な活動に属している。

⑥ 人間活動の一環として言葉を考察する場合、活動の背景となる文化的条件や、人類の普遍的条件を考える必要が出てくる。これをもれなく記述しようとすれば限度がなくなるので、記録とは違う別の手段をもつべきだ。

⑦ 言葉に関する考察の対象は、特殊な事例よりも、人々の生活の前提になっているがゆえに見落とされがちな対象であるべきだ。その際に大切なのは、言葉を使うという活動の多様性や動的性質を考慮することだ。

問11 二重傍線部(イ)〜(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 16 〜 20 。

(イ) ジュンチョウ 16

① 施設をジュンカイする
② 変化にジュンノウする
③ 事実をジュンショクする
④ 話がムジュンする
⑤ 水がジュンカンする

(ロ) スイコウ 17

① 事件はミスイに終わった
② スイチョクに落下する
③ 経済のスイタイ
④ 計画をスイシンする
⑤ ジュンスイな蜂蜜

(ハ) カンキ 18

① 山をカンツウするトンネル
② ハンカンハンミンの組織
③ ひなびたカンソンの風景が広がる
④ アビキョウカンの混乱
⑤ ジャッカンの猶予が与えられる

(ニ) ジュウナン

19

① ボクジュウをこぼす
② チョウジュウの保護に乗り出す
③ 戦場にジュウカの音が響く
④ 尾根をジュウソウする
⑤ ユウジュウフダンな態度を取る

(ホ) タサイ

20

① 人間万事サイオウが馬
② サイエンで作物を収穫する
③ シキサイ豊かな絵画
④ サイム超過に陥る
⑤ 神社のサイレイに臨席する

第2問　次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

遊牧民を表す「ノマド」がポストモダン思想のキーワードとして注目されたのは１９８０年代だった。仏思想家ドゥルーズらは、［　X　］な定住民とは対極的な思想や生き方を示すのにこの言葉を用いた。

ノマドロジーとは権力のくびきを脱し、(イ)あらゆる境界を自在に超えて多様性を生きる新時代の思想を表していた。だがその思想的未来像は、グローバル経済が人々を故郷から切り離し、世界を放浪させる時代の到来とも重なっていた。

それから数十年、グローバル経済はその本拠の米国でもかつての中間層を分解させながら、周縁部に放浪の民を作り出している。今日、ノマドとは車上生活をしながら、季節労働の仕事を求め移動をくり返す米国の高齢労働者をいう。(ロ)

中国出身のクロエ・ジャオ監督の映画「ノマドランド」が米アカデミー賞の作品賞や監督賞を受賞した。金融危機の影響で住み慣れた家を失った60代の女性のノマド暮らしと、他のノマドとの交流を描いた異色のロードムービーである。

住宅ローンの破綻や製造業の海外移転で急増した米国のノマドだった。彼らは「定住」を破壊したグローバル経済の被害者だが、出演した実際のノマドたちの言葉は誇り高く、誰にも優しい。21世紀のノマドロジーとでもいえようか。(ニ)

「この賞をお互いの善意を保ち続ける信念と勇気をもつ人たちにささげます」。むろん出身国で非愛国者呼ばわりされるジャオ監督自身もノマドである。現代文化の沸騰点を指し示す今年のアカデミー賞だ。(ホ)

（『毎日新聞』　二〇二一年四月二七日　「余録」による）

問1　空欄 X に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 21 。

① 固定的・外向的
② 反動的・開放的
③ 画一的・閉鎖的
④ 分散的・閉鎖的
⑤ 流動的・開放的

問2 破線部**ア**「くびき」と近い意味の語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 22 。

① 翼賛
② 葛藤
③ 魅力
④ 苦渋
⑤ 束縛

問3　破線部**イ**「労働」とあるが、近代日本において労働者の窮状などを題材とした小説のジャンルにプロレタリア文学があり、その代表的な作家の一人として徳永直がいる。徳永によるプロレタリア文学作品として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **23** 。

① 『太陽のない街』
② 『放浪記』
③ 『海と毒薬』
④ 『焼跡のイエス』
⑤ 『蟹工船』

問4 破線部**ウ**「異色」の対義語として**適切ではないもの**を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **24** 。

① 月並み
② 尋常
③ 紋切型
④ 白眉
⑤ 凡庸

問5　波線部(A)「ささげます」とあるが、この動作の主体として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 25 。

① 本文の筆者
② アカデミー賞の選考委員
③ グローバル経済の被害者
④ 米国のノマド
⑤ ジャオ監督

問6　本文の主旨として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **26** 。

① １９８０年代にドゥルーズらによって紹介された「ノマドロジー」は、地域や文化の壁を超えて生きる人々を象徴する思想としての新しさを、現代文化においてもなお失っていない。

② 映画「ノマドランド」で取り上げられた「ノマド」は、現代の米国において季節労働を求めてさすらう高齢労働者を指し、グローバル経済の進展により故郷や安定した暮らしから切り離された存在として社会問題化している。

③ ジャオ監督の映画「ノマドランド」が米アカデミー賞の作品賞・監督賞を受賞したのは、ともすれば多様性を生きる存在として理想化されがちだった「ノマド」の実態を的確に描いたからである。

④ グローバル経済の進展に伴う製造業の海外移転により米国の「ノマド」は急増したが、彼らは逆境に耐えつつ安住の地を再び得る希望を捨てずに生きている。

⑤ 今年のアカデミー賞では、車上生活をする米国の高齢労働者を指すようになった「ノマド」を、単なる被害者としてではなく善意と誇りを保ち続ける強さを持った存在として取り上げた映画「ノマドランド」の受賞が目を引く。

問7 二重傍線部(イ)〜(ホ)の品詞名を、後の①〜⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 27 〜 31 。

(イ) あらゆる境界 27

(ロ) 高齢労働者をいう 28

(ハ) 言葉は誇り高く 29

(ニ) とでもいえようか 30

(ホ) アカデミー賞だ 31

① 名詞　② 動詞　③ 形容詞　④ 連体詞

⑤ 副詞　⑥ 接続詞　⑦ 助詞　⑧ 助動詞